



21世紀の大学教育は国際人材育成

立命館アジア太平洋大学の取り組み

山辺 眞一

(よかネットNO.63 2003.5)

- 4 学術研究都市

これまでになかったキャンパスの風景

2000年4月に大分県別府市に開学した「立命館アジア太平洋大学」は、「アジア太平洋学部」、「アジア太平洋マネジメント学部」の2つの学部から成り、1学年800名、4年生まで揃って3200名の規模の新設大学である。平成14年度に行った調査で大学を訪問する機会があり、これまでになかった大学という印象を受けたので紹介したい。

何が印象的だったのかを一言で言うと、日本人だけでなく、日本人以外の学生がキャンパスの中にたくさんいたということである。設立前から海外留学生を学生数の半分入学させるといった情報は出ていたが、ご存じのようにどこかの大学では入学者数を確保するために、中国留学生を大量に入れて失敗したという新聞記事が出て、この大学も同じことをするのかと思っていた。しかし、話を聞いて全く違うことが分かった。

中韓台からの留学生は半分にする

アジア太平洋地域からの留学生は全体の半分、2002年10月時点で、全学生1902人のうち留学生は904人である。このうち中国・台湾・韓国は431人で、留学生の50%以内に制限するという方針であった。大学を訪問した日がたまたまオリエンタリングの日であったためと思うが、日中台以外と分かる多彩な人種の若者たちがいた。国際人養成という国の大学教育における大方針はあるものの、実際にそういう教育環境を実現し、日常的に異文化に触れ、知ることができる場は日本の中では皆無に近く、日本人学生の国際感覚を養うというコンセプトをまさに具体化した大学である。

通常の留学生の受入とは違う

もう一つの特徴は、英語による講義が広く採用されていることである。そのため外国籍教官も50%の比率で採用されているが、留学生にとって英語の講義が最初から受講できるということは、従来、日本の大学入学に必要なだった日本語の研修期

間が必要なくなったということである。このことは、所得格差があるため半年から1年近い日本語研修の準備期間が負担となっていた留学生にとって、大学に入学して徐々に日本語を学べる、さらに同世代の若者と日常的に交わりながら覚えられるというだけでなく、日本の学生にとっても魅力的な環境であり刺激になっている。

1科目が1万8千円

留学生を受入れるため、4月、10月の2回入学式があり、セメスター制によって2期に分けられている。また、アメリカなどで行われている「単位制授業料」が採用され、1単位の受講に18千円を支払う。これは、国内ではほとんど行われていないが、単位を取得することへの日本人学生の意識改革に大きく役立っている。さらに学生だけでなく、日本人教官にとっても良い刺激となり、講義での様々な工夫など、ひと味違う講義となっている。しかし、最終の試験だけで単位が取得できるという訳でもなく、試験は50%、講義が50%という成績評価システムも取り入れられている。学生は日々の学習に追われ、休暇以外にアルバイトをする時間もないため、試験が終わると、蜘蛛の子を散らすようにキャンパスで見かけなくなるそうだ。

長い目で見ると

この大学が立地するために、大分県と別府市、地元の誘致活動、設立支援には相当の投資があったことは容易に想像できる。全体で約300億円の投資があったと言われている。また、各国からの留学生を確保、受け入れるためにも、留学生奨学制度のための基金、海外への宣伝活動、そのための人的ネットワークづくりなど、それらのコストも含めると、もっとお金がかかっているはずである。

しかし、毎年800人の卒業生がこの大学で得た国内外の人々のネットワークを持って、アジア太



立命館アジア太平洋大学キャンパス中央の風景

平洋地域、さらに世界に散らばっていくということは、日本にとってあるいは各国にとっても、「人脈」という大きな財産を得ることになり、費用対効果などでは到底測れないものではないだろうか。

日本のイメージは別府から

別府市に立地が決定してから、大学開設の準備と並行して、市内でAPU (Asia Pacific University) 講座という公開講座などの地域連携活動も当然行われている。大学の人的資源を活用して地域でこんなことができるようになるという宣伝も兼ねたものである。さらに開学後は別府市だけでなく、自治体との交流協定や教官の地元講座への派遣など様々な交流も実施されている。ユニークなのは、多数の留学生が日本を知る場として、短期のホームステイ制度が取り入れられ、同世代だけではなく、多世代の人々の交流も行われていることである。

ちなみに、留学生がこの大学に来る最大の理由は日本の経済的發展、企業發展などのプロセス、マネジメントを学ぶことであり、自国の發展のために彼らは勉強をしにきており、この姿勢は日本人学生にとっても大きな刺激となっているはずである。